

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

拡張するミュージッキング研究＜共同研究：
音楽する身体間の相互作用を捉える：
ミュージッキングの学際的研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野澤, 豊一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009590

拡張するミュージッキング研究

文 野澤 豊一

広がるミュージッキング研究

4年あまり前、本プロジェクトの構想を練っていた私の頭のなかにあったもくろみは、一般に「音楽実践」と呼ばれる場面の焦点を、音楽というテキストに限定するのではなく、「ミュージッキング」すなわちその場で繰り広げられる音と動きのやりとりをずらしていくと、どのような地平が拓かれるだろうか、というものであった(野澤 2017) [④](#)。私自身、米国の黒人教会における音楽的礼拝のダイナミズムを論じるなかで、このアプローチの有望さを実感していたのだが、「この世に『音楽』などない。あるのは、^{ミュージッキング}音楽するという行為なのだ」というクリストファー・スモールの主張(スモール 2011)を出発点に、幅広い研究・調査背景をもつ研究者のあいだで意見を戦わせてみてはどうか、というのが当初の考えだった。

3年半のあいだ、本プロジェクトは15回の研究会を開催し、のべ34名(うちゲスト講師12名)が発表を行った。どの発表も特定の地域や時代に根差したミュージッキングに関するものでありながら、質疑応答では個別の背景や文脈を超えて議論が行われた。ミュージッキングの普遍性を考えるうえで大事なヒントが浮上することもしばしばあった。地域や研究分野を限定せずに共同研究のメンバーを構成したことのメリットというべきだろう。

さて、研究会を重ねるなかで、当初かかげた問いが深く掘

り下げられた一方で、研究分野や対象によってミュージッキングという概念の捉え方自体が多様であることも明らかになっていった。そのこと自体は予測していたことではあったが、話題の広がり方は私の想像を遥かに超えるものであった。これはむしろ嬉しい驚きであり、結果として本プロジェクトの視野の幅は広がった。目下、研究会の成果が盛り込まれた論集を準備中だが、ここではミュージッキング研究が本プロジェクトのなかでどのように広がっていったのか、その一端を紹介しよう。はじめの2つは当初私がかかげた問いの延長線上に位置するといえる事例であり、続く2つはそれとは異なる可能性を拓くべく提示された事例である。

ミュージッキング——“音楽”ではなく

医療人類学を専門とする浮ヶ谷幸代(相模女子大学)は、北海道浦河ひがし町診療所における「音楽の時間」について報告した(2018年11月18日発表; 浮ヶ谷 2018)。浦河町は、自身の精神障がいの経験を仲間と一緒に語り合う「浦河べてるの家」で有名だが、この診療所の「当事者」たちは、自分のことを他者に語ることを苦手とする。「音楽の時間」ではおもに打楽器を手にした当事者たちによる演奏が繰り広げられる。とはいえ、コーディネーター(プロのジャズ奏者のT)が次々と誰が叩くかを指示するだけで、どう叩くかはその人に任されているという自由なセッションである。数年続けるなかで、徐々に音の長さを指示する合図などが決

まっていき、それによって合奏的まとまりができてきたものの、セッションの全体にわたって「音楽」らしいものはない。その代わりに(あるいはだからこそ)、セッションはにぎにぎしく楽しい。「上手に演奏すること」よりも「楽しいこと」を目指すのだとTが語るとおり、セッションでは「失敗」が起こってもそれを笑い合うことで場はむしろ和み、盛り上がるのだ。

同じ日に発表した音楽教育学者の西島千尋(日本福祉大学)は、医療および介護現場で行われる音楽的実践のうち、方法論が十分に確立しているものとしては日本で最も実践者数が多いとされる「ミュージック・ケア」を取り上げた。高齢者や障がい児な



高齢者施設におけるミュージック・ケアのセッションの様子(2018年3月、福井県坂井市、西島千尋撮影)。

野澤 豊一 (のざわ とよいち)

富山大学学術研究部人文科学系准教授。専門は文化人類学、ミュージッキング研究。分担執筆に「もうひとつのおわら風の盆一夜を流す名人たち」阿南透・藤本武編『富山の祭り一町・人・季節輝く』（桂書房 2018年）、共訳書にトマス・トゥリノ著『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ—歌い踊ることをめぐる政治』（水声社 2015）などがある。

どを対象とするミュージック・ケアのセッションでは、おもにCDが用いられ、対象者（たいていは複数）は曲に合わせて、比較的単純ながらもリハビリなどのための効果が経験的に知られた動作をする。ここで大事なのは、曲に合わせて体を動かすことは誰に強制されるものでもないということであり、セッションのリーダー役が、そのなかで対象者をうまく動機づけて動作に誘い出すということである。

いずれの発表でもセッションの動画が上映されたが、誘い出しのためになされる声掛けやちょっとしたしぐさ——まさに「音楽」ならぬ「ミュージッキング」というべきもの——がセッションの行方を左右する様子が看取できた。いずれも、一見したところ、近代的な「音楽」の枠組みにありながら、「作品」や「演者と観客の分離」といった枠組みからごく自然な形で切り離されている点が興味深い。医療やケアという文脈では、近代の約束事とその根元から問い直される傾向があるのかもしれない。

物語る・想起するというミュージッキング

音楽社会学が専門の井手口彰典（立教大学）は、2014年2月にメディアを賑わせた1つの事件を取り上げた（2018年12月22日発表）。全ろう者であることや被爆二世であることを公言していた作曲家・佐村河内守へのメディアの注目が頂点に差し掛かったとき、ゴーストライティングを依頼されていた新垣隆がその事実を暴露したという出来事である。

世間から裏切りという批判が噴出したこの事件だが、井手口はこれを逆説的に解釈した。すなわち、世の中にあるのは音楽ではなく、そこに人を巻き込む物語をも含むミュージッキングだというスモールの主張に倣えば、佐村河内は人びとに聴かれるべく巧妙な物語を設定したミュージッキング実践者だったというのだ。そんな佐村河内が否定されたのは、現代日本のクラシック音楽界において音楽を「出来事」として捉える視点がないからであり、「佐村河内劇場」が綻びを見せたときの反応はスモールが批判したところの「作品中心主義」のためでもあった。「しかし」と井手口は問う。「『音楽』ではなく『ミュージッキング』を肯定するのであれば、我々は佐村河内も肯定すべきなのだろうか」と。

歴史人類学者の青木深（東京女子大学）は、戦時期の日本で量産された「中国風」歌謡のなかでもとくに米軍将兵に人気があった「支那の夜（China Night(s)）」が、どのよう

にアメリカ人のあいだで想起されているかに着目した（2018年1月20日発表）。現在、YouTube上でいくつもの“China Night(s)”のバージョンを聴くことができるが、そのコメント欄にはこの曲にまつわる人びとの記憶、たとえば駐日中の記憶や、この歌が吹き込まれたレコードを土産として受け取ったときの記憶が錯綜している。オンライン空間で、人びとの集合的な記憶が活性化しているのである。story（物語）とhistory（歴史）は語源を同じくするというとおり、オンライン上で書き込む人びとは、それらを「歴史」として定着させているのだともいえる。さらに青木は、そこに文字がもつパフォーマンス性を指摘する。すなわち、「作品」だけでなく、「書く」という行為、さらに誰かが書いたことに「触発される」という動態への着目である。

井手口と青木は、人びとが作品や作曲家、あるいはそれらに対する思いをいかに語り、想起するのかという営み自体をミュージッキングとして把握しようとする。私たちを取り巻く音楽の言説空間はどのように構築されているのか、その政治や動態を描き出すという研究の方向性がここから導き出されるのだ。スモールはミュージッキングという言葉が価値判断に基づいて使用されてはならないと強調しているが（スモール 2011: 31-32）、たとえば井手口の問題提起は、スモールが避けて通ろうとしたミュージッキングの倫理学に踏み込むものだ。本プロジェクトは、ミュージッキング研究が、こうした観点からも豊かに展開される可能性を示したといえる。

引用文献

- 浮ヶ谷幸代 2018「生を刻む みる・きく・たたく・かわす—北海道浦河ひがし町診療所の『音楽の時間』から」『コンタクト・ゾーン』10(2018): 186-209。
- 野澤豊一 2017「ミュージッキング研究の挑戦—音楽のリアルな姿に迫るために」『民博通信』157: 14-15。
- スモール, C. 2011『ミュージッキング—音楽は（行為）である』野澤豊一・西島千尋訳、東京：水声社。